

石井 忠厚

- 5) *ibid.*, p. 63-65.
- 6) G. Cohen, *Écrivains français en Hollande dans la première moitié du XVII^e siècle*, Paris, 1920, p. 387.
- 7) H. Gouhier, *op. cit.*, p. 27.
- 8) G. Rodis-Lewis, *op. cit.*, p. 49.
- 9) A. T. VI, p. 17 L. 11-L. 20.
- 10) §2 注 4) 引用論文, p. 78.
- 11) 同上 p. 79 及び拙論「青年デカルトの知的冒険」(紀要 No. 45, 1986) p. 113.

§4 薔薇十字

- 1) 田中仁彦, 前掲書, p. 373 註 39) の推測は妥当。
- 2) A. Baillet, *La vie de Descartes*, 1691, t. II. p. 406.
- 3) *ibid.*, p. 87-88.
- 4) *ibid.*, p. 90.
- 5) *ibid.*, p. 91.
- 6) *ibid.*, p. 109.
- 7) H. Gouhier, *op. cit.*, p. 118.
- 8) *ibid.*, p. 121.
- 9) G. Rodis-Lewis, *op. cit.*, p. 40.
- 10) G. Cohen, *op. cit.*, p. 388.
- 11) 田中仁彦, 前掲書, p. 105-106.
- 12) N. Poisson, *Remarques sur la méthode de René Descartes*, 1670, p. 31.
- 13) 竹田篤司『デカルトの青春』(勁草書房, 昭和40年), p. 31.
- 14) A. T. X, p. 252.
- 15) *ibid.*, p. 258.
- 16) G. Milhaud, *Descartes savant*, 1921, p. 86-87.
- 17) *Exercices pour les éléments des solides*, éd. par P. Costabel, Paris, 1987, p. 54.
- 18) G. Milhaud, *op. cit.*, p. 86.
- 19) P. Costabel, *op. cit.*, p. 107-108.
- 20) A. T. V, p. 176.
- 21) 田中仁彦, 前掲書, p. 113-123 においてこの論文の要旨は繰り返されている。
- 22) P. Costabel, *op. cit.*, p. 53, 54 において《ファウルハーバー及びその弟子たち》の表現が見られる。
- 23) A. T. X, p. 113.
- 24) *ibid.*, p. 297.
- 25) *ibid.*, p. 214 L. 9-19.
- 26) H. Gouhier, *op. cit.*, p. 109.
- 27) *ibid.*, p. 114.
- 28) A. T. X, p. 157 L. 17-21.
- 29) *ibid.*, p. 215 L. 5-6.
- 30) H. Gouhier, *op. cit.*, p. 138.
- 31) 田中仁彦, 前掲書, p. 183.
- 32) J. Sirven, *Les années d'apprentissage de Descartes*, Paris, 1928, p. 298.
- 33) H. Gouhier, *op. cit.*, p. 70, n. 44.
- 34) G. Rodis-Lewis, *op. cit.*, p. 445, n. 99.
- 35) H. Gouhier, *op. cit.*, p. 137-138. / 36) 田中仁彦, 前掲書, p. 183-184.

注

§1 《珍奇な学》

- 1) フランセス・イエイツ『薔薇十字の覚醒』(山下知夫訳, 工作舎, 1986: The Rosicrucian enlightenment, 1972), p. 306.
- 2) Discours de la méthode, A. T. VI. p. 5.
- 3) E. Gilson, Commentaire, 4 éd., p. 109.
- 4) DM, A. T. VI, p. 9.
- 5) E. Gilson, op. cit., p. 110.
- 6) F. de Dainville, La géographie des humanistes, Paris, 1940, p. 97-98.
- 7) DM, A. T., p. 6.
- 8) ibid., p. 9.
- 9) F. de Dainville, L'enseignement de mathématiques dans les Collèges Jésuites de France, Revue d'histoires des sciences VII, 1954, p. 110.
- 10) E. Gilson, op. cit., p. 109.
- 11) ibid., p. 127.
- 12) ibid., p. 126.
- 13) A. Koyré, Metaphysics and measurement, London, 1968, p. 40, n. 2.
- 14) 佐々木力『科学革命の歴史構造』上(岩波書店, 1985) p. 192.
- 15) 田中仁彦『デカルトの旅／デカルトの夢』(岩波書店, 1989) p. 71-72.
- 16) Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit en la recherche de la vérité, traduction et annotation conceptuelle par J.-L. Marrion avec des notes mathématiques de P. Costabel, La Haye, 1977, p. 205.
- 17) H. Gouhier, Les premières pensées de Descartes, 2 éd., Paris, 1979, p. 112-113.
- 18) ibid., p. 112.
- 19) G. Rodis-Lewis, L'oeuvre de Descartes, p. 22.
- 20) V. Ronchi, Histoire de la lumière, Paris, 1956, p. 57.
- 21) DM, A. T. VI, p. 9.
- 22) H. Gouhier, op. cit., p. 111.

§2 自然魔術

- 1) Cogitationes Private, A. T. X, p. 232 L. 1-2.
- 2) H. Gouhier, op. cit., p. 111 et n. 34.
- 3) CP, A. T., p. 215 L. 18-p. 216 L. 18.
- 4) 拙論「デカルト 1619年春」(東海大学紀要文学部 No. 46, 1986) p. 88.
- 5) この引用文を含む一段落は A. T. X, p. 90 L. 1-7.
- 6) G. Rodis-Lewis, Machineries et perceptions curieuses dans leur rapports avec le cartésianisme, XVII siècle, 1956, p. 466.
- 7) 澤井繁男『魔術の復権』(人文書院, 1989) p. 112.
- 8) 田中仁彦, 前掲書, p. 74.
- 9) A. T. X, p. 29, note a.

§3 ルルス術

- 1) G. Rodis-Lewis, op. cit., p. 39.
- 2) A. T. X, p. 156 L. 7-p. 157 L. 4.
- 3) ibid., p. 164 L. 15-p. 166 L. 1.
- 4) ibid., p. 167 L. 2-p. 168 L. 17.

それまでの文の勢いがこれでは龍頭蛇尾である。

ロディス・レーヴィスはファウルハーバーの『数論の奥義』に次いでの意味ではあるまいかと自問している³⁴⁾。これにはグイエの指摘、《celeberrimis in G. F. R. C. は『奥義』の献辞〈laudatissimis Frat. R. C. dicata〉のヴァリエーションである可能性さえある》³⁵⁾、というそれ、が支えとなろう。しかしこの解釈もやはり『財宝』が薔薇十字だけを相手に書かれたとしているため、先に述べた理由から同意できない。

田中仁彦氏は『オリムピカ』に次いでの意味に解されている。氏は『数学の財宝』=『パルナッスス』とした上で、『パルナッスス』(地上の学)と『オリムピカ』(天上の学)の一对の出版を、デカルトは目論んだのだとされる³⁶⁾。しかし、先ず、『数学の財宝』の「数学」は狭義のそれ、《全く新しい学》=「幾何学」と解すべきである。「機械学」と「幾何学」を分離すべきだという考えは、ブレタ時代のペークマン宛書簡に既にデカルトに芽生えている。更に「羊皮紙の手帖」のB系列の開始、再編成の意図、はより決定的に『パルナッスス』が従来のものであることを許さない。それに『オリムピカ』=超自然学は、新旧いずれであれ、『パルナッスス』=自然学の前提なしにはその真意は不可解で、簡単に類書と誤解される。両書の出版が、仮に企てられたとしても、その順序は『パルナッスス』(従って田中氏の解釈によれば、『数学の財宝』)の方が先行すべきなのである。それゆえこれに《再び》が付されるはずがない。

われわれは、《再び》の語は《驚くべき学問》のプログラム兼全著作群の総序、『ブラエアンブラ』の本体に次いでの意味に解したい。

*

*

*

以上のように、『数学の財宝』の注解は、デカルトが十分に強く薔薇十字を意識し、それに敬意すら払っていることを示す一方、彼がもはや彼らだけを相手にする立場から脱け出し、全人類へ呼び掛ける地点に到達していることを証している。にもかかわらず、彼が薔薇十字になお拘り続けるとすれば、彼らが彼には見通せない何かを握っている可能性があるからであり、これに精神を開き続けることを彼のソクラテス主義が要請するからである。

結

薔薇十字は、デカルトが学院以来失っていた、学と知恵の一致に対する確信を回復するのに、一定の役割を果たしたことは否定できない。しかしその役割はあくまでも外的刺激にとどまるものであって、デカルトの内的成熟を促進したというに過ぎない。

デカルトは薔薇十字に対して直ちに敵対的ではない。しかしそのことはこの運動に対するデカルトの共感的関心を意味するわけでもない。デカルトは確かに関心を示したが、それはむしろ異質の世界に対する好奇心とでも言うべき性質のものである。

デカルトは、薔薇十字に出会うまで、ルネサンス・オキュルティズムの「正統派」に接する機会を、あるいは奪われ、あるいは自ら放棄してきた。そして薔薇十字において、ヘルメス・カバラ主義に初めて本格的に対面する機会を与えられたときには、彼にはそれを理解する鍵、共鳴の基盤、とでも言うべきものは、失われていたのである。それゆえ『良識の研究』は著者の薔薇十字探索を、《私は今なお彼らについては何も確かなことを知らない》という言葉で結ばざるを得なかったのである。

薔薇十字は、いずれにせよ、遅咲き過ぎたと言うべきであろう。

ようとする傾向が強い。しかしそれでは《世界市民》を自称する著者の精神に反することになる。いうなれば、この計画されている本は超薔薇十字なのであって、あくまでも《驚くべき学問》のマニフェストの一環として性格づけられるべきものなのである。確かに《新普遍学》のマニフェストは巷に溢れている。それゆえ類書と一線を画するために、論争的性質を帯びざるを得ないという側面はある。だがそれが全てではない。全人類の《財宝》の積極的提示こそこの本の本質である。

*

*

*

詳細の最後の一文、《全人類の学者たち、そしてとりわけG（ゲルマニア）における最も高名なF・R・Cに再び捧げられる》は、われわれの解釈によれば、肯定的に受け取られるべきである。すなわち、薔薇十字は《全人類の学者たち》の仲間であって、空しい《約束をする人々》のうちには数えられていないと。

確かに、われわれは、とりわけF・イエーツによって、薔薇十字がヘルメス＝カバラ的伝統にパラケルススの錬金術の流れを加えた、アルプス北方の遅咲きのルネサンス思想であることを知っている。それゆえ《驚くべき学問》＝数学を基礎とする合理主義的体系の開示者からは、薔薇十字は、ルルス主義者と同様、皮肉と嘲笑を浴びるのにふさわしいように見える。

しかしわれわれの知識はデカルトのそれではない。問題はデカルトが薔薇十字をどう見ていたかである。

先の『良識の研究』に関する検討によれば、デカルトには薔薇十字を特別に意識して、とりわけ彼らに『財宝』を捧げるべき理由があった。

第一に、彼らはある意味では彼の恩人である。彼らの刺激、彼らとの《競争の衝動》こそ彼をして《驚くべき学問》の発見に至らしめたからである。

第二に、彼らの一人ではないにしてもそのシンパとしてファウルハーバーがいた。彼らが彼のライヴァルとして意識されるほど強烈な刺激となり得たのは、この人物が学者とてん師を区別する規準のうち、ソクラテス主義はいざしらず、実績主義の方は申し分なくクリアしていたからである。

第三に、にもかかわらず、ファウルハーバーの数学と薔薇十字との共通の基盤、カバラ主義はデカルトの理解を越えていた、少なくとも彼にはなじめないものであったがゆえに、その正体を究めることは、依然、いや《発見一夢》以後、より一層、彼の課題となった。そしてこの場合、薔薇十字文書は何の助けにもならなかった。それゆえ《対話》に期待する以外になかったのである。この意味で、『財宝』を薔薇十字への呼び掛け、あるいは『名声』への応答とさえする田中仁彦氏の解釈は正当な根拠を有している⁸¹⁾。だが氏はそのことだけを目的として『財宝』が構成されたとする点で、行き過ぎの誤りを犯しているように思われる。《全人類の学者たち》は決して修辞ではない。デカルトは《驚くべき学問》の告知を神から自分に与えられた使命と考えているのだから。とはいえ、『財宝』が彼の薔薇十字探索の一環の意味をも、しかも重要なそれとして、与えられていたことは否定できない事実である。

*

*

*

最後に《再び捧げられる》の《再び》の意味について。

シルヴァンは《われわれの学者は既に数学を改革した。そして彼はその努力の成果を改めて与える》と解するが⁸²⁾、これでは、グイエが言うように、原文の意味をより判明にしたとは言い難い。だがグイエ自身の解釈、《ここにもまた学者たちに捧げられた本がある》⁸³⁾もデカルトが『財宝』に籠めた意気込みにそぐわない。これは類書の一つだと謙遜してみせたとでもいうのだろうか。

いずれにせよ、デカルトは《普遍》を求め、その《鍵》を手にしたと称する、ルルス主義者を初めとする、ルネサンス的新思想家たちの一員として名乗り出ているわけである。

彼は、しかし同時に、彼らと一線を画する。

まず、彼は彼らの約束の遅延を告発する。自分は《鍵》の真の所有者であることを、少なくとも、数学において《あらゆる難問を解くこと》で示した。それに反して、君たちはいかなる分野においても何ら実績を示していないではないか。

次に、彼は彼らの無謀を非難する。自分は人知の限界を自覚している。ここまでしか解けないということを論証するのはそのためである。しかし君たちは人間が神になり得るかのように語っている。まさにそれだからこそ、君たちは実現できないことを約束するいかさま師になってしまうのだ。

《普遍》に至る知の可能性の確信と人間精神の有限性の自覚が、《順序》の厳守を中核とする、方法の重視に結実する。それゆえデカルトの《驚くべき学問》に天上の力をも支配することを目指すヘルメス＝カバラ的要素が皆無であるのも当然なのである。確かに《驚くべき学問》はオリンピカの超自然学を含む。しかしそれは天使をも操ることを目指すものではなく、神と人間精神の認識を深めることによって、両者の根本的差異を徹底的に自覚することをその目的としているのである。もちろん人間の自由は、その神性の証であるが、これとて真の奇跡、神の一方的恩恵として把握されている。これらのことは拙論「《オリンピカ》論」(紀要 No. 48) に詳しく述べてある。

いずれにせよ、一種のソクラテス主義こそデカルトを他の競争相手から区別する大きなメルクマールである。新しい知の生産性以上に。

*

*

*

デカルトは『財宝』のもう一つの目的を述べる。

《更に、この学問のいわばゴルディアスの結び目に夜も昼も捕えられて、精神の油を空しく費やしている多くの人々の苦しい労働を和らげるために》。

『財宝』の先の目的が、少なからず挑戦的であったように、ここで示されているそれも性格を同じくするのであろうか。

グイエのように、ここにも皮肉を見る読み方もある³⁰⁾。確かに《精神の油を空しく費やす》という表現には嘲弄の響きを感じること可能であろう。しかし《……多くの人々》に対する同情＝共感を読む研究者も少なくないのである。尤も彼らはフーシェ・ド・カレイユ版の《多くの人人 (F. Ros. Cruc.)》に従って、しかもデカルトの薔薇十字への共感を探すことに熱心な人達ではある。われわれは問題の一節に皮肉を見る読みにも賛成しかねるが、共感の対象を薔薇十字に限定する読みにも同意しかねる。AT版によって、従ってカレイユ版の括弧をこの編集者の解釈として、読んでみたい。

ここでは、《普遍》を誇大広告的に約束しない、地道な学者たち、とりわけデカルトに親しい数学的自然学者たちが問題である。ベークマンのような優秀な自然学者ですら、例えば「落下問題」において数学＝ゴルディアスの結び目に捕らえられてにっちもさっちもいかず、結局、一人の青年士官の数学的才能に助けられて、初めて《労働》が結実したことは、『財宝』の著者にとって経験的に生々しいところである。それゆえこの本のもう一つの目的は、ベークマン的な新しいタイプの自然学者に、より完備した自然の言語＝数学を提供することによって、その労苦を軽減してやりたいという心からの申し出ということになる。

従来の解釈者は、『財宝』を親薔薇十字か反薔薇十字かという文字通り党派的精神からのみ見

《ポリビウス・コスモポリタヌス》という仮名の意味。

《コスモポリタヌス》に、明らかに、力点が置かれている。いかなる国、党派にも属さないという意味で、《ドイツにおける薔薇十字団員》と対比的である。しかし単なる論争的意図の下にこの名が選ばれたのではないだろう。この本は《全人類の学者たち》、それゆえ結局は、全人類に捧げられているのだから。

しかしそれなら何故カルテジウス・コスモポリタヌスであってはならないのか。《夢》においてデカルトが自覚させられた罪の一つは傲慢であった。彼は神の道具に過ぎない。『プラエアンブラ』は《神を畏れることこそ知恵の始まり》というエピグラムを有していることを想起しよう。

それにしても何故《ポリビウス》。グイエが巧みに推測する。この歴史家のラテン語訳書は常にポリビウス・メガポリタヌスの云々とされていたと²⁶⁾。そしてポリビウスも付随的には意味を獲得する。デカルトは、学問について、虚構を語る romancier ではなく、事実のみを述べる historien なのだから。

*

*

*

《『数学の財宝』》という題名。

グイエは《財宝 Thesaurus》は、パラケルススを初め、新学者たちの乱用する語であることを指摘し²⁷⁾、ここにもデカルトの論争的、挑戦的皮肉を見る。だが、この慎重な学者は、『オリンピカ』の語る《夢》において、デカルトが《諸学の財宝》を開示されていることを忘れてるように思える。この本はこの《財宝》の一端を見せるべく意図されているのである。

*

*

*

詳細の注解に入る。

《ここではこの学問のあらゆる難問を解くための真の手段が告知され、それらについて人間の精神によってこれ以上のものを提示することは不可能であることが論証される》。

これは、デカルトが《全く新しい学》〔その本質は幾何学的代数〕についてベークマンに語ったことのほぼ忠実な再現である。《どのような種類の問題はどういうやり方で解けて、その他のやり方では駄目かということを、私は証明したいと思っています。それゆえ幾何学において新しく見出すべきことはほとんど何も残らないでしょう》²⁸⁾。このプログラムが1619—20年冬にある程度実践されたことは『序説』が証言している。だが、『プラエアンブラ』においては、《人間の精神によっては》という限定条件が1619年春の「手紙」より自覚的に明示されている点に進歩がある。《万人の精神にはある種の限界が定められていて、それらを越えることは出来ない》²⁹⁾。これは《炉部屋》において《私自身を吟味した》ことの成果である。ここには、数学—自然学の単なる愛好者（どれほど野心的であろうと）ではなく、知恵=知識の一致を確信した愛知者がある。

*

*

*

続いて本書の目的が示される。

先ず、《あらゆる学問において、新しい奇跡を開陳すると約束する人々の特に遅延を告発し、無謀を排斥するために》。

《あらゆる学問において、新しい奇跡 nova miracula を約束する人々》とは誰のことであろうか。

デカルト自身がそのひとりであることは間違いない。彼は《驚くべき学問 mirabilis scientia》の創設者を自負しているのだから。それゆえ単なる数学書において《あらゆる学問》が問題となるのも不思議ではない。この本が《驚くべき学問》の素描を与えるべき『プラエアンブラ』の付論として意図されたことを考えるならば。

あるカバラ、一般にオキュルティズムに対する彼の共感の欠如のゆえに、彼の支持を得ることは出来なかったのである。しかしこのことは直ちに彼がオキュルティズム＝ルネサンス思想を拒否したことを意味しない。彼は敬意を保持しつつ、それを共感＝理解へと変える可能性には精神を開いている。

第二節 『数学の財宝』——『プラエアンブラ』の一断片——

さて、薔薇十字への言及があるのは、『良識の研究』だけではない。この作品に先立つ『プラエアンブラ』もまたこれについて触れている。この表題の下にある断片群は「羊皮紙の手帖」のB系列中にある。

とにかく再現することにしよう。

《ポリビウス・コスモポリタヌスの『数学の財宝』。ここではこの学問のあらゆる難問を解くための真の手段が告知され、それら〔＝難問〕について人間の精神によってこれ以上のものを提示することは不可能であることが論証される。あらゆる学問において新しい奇跡を開陳すると約束する人々の特に遅延を告発し、無謀を排斥するために。更に、この学問のいわばゴルディアスの結び目に夜も昼も捕らえられて、精神の油を空しく費やしている多くの人々*の苦しい労働を和らげるために。全人類の学者たち、とりわけG（ゲルマニア）における最も高名なF・R・C（薔薇十字兄弟団）に再び捧げられる》（*フーシェ・ド・カレイユ版はこの後に（F. Ros. Cruc.）と付加）²⁵³。

この箇所の注解に入る前に、文脈を明らかにする必要がある。

* * *

「羊皮紙の手帖」は、本来、デカルトがベークマンに約束した諸論文のための覚え書きであり、A系列からのみ成り立っていた。すなわち『パルナッスス』——「機械学」あるいは「幾何学」——、加えて「諸学一般の考察＋代数論」、そして『デモクリティカ』（＝多分、自然哲学）。しかしこれらの著作計画は《ある日》の《昼の思索》と《夜の夢》の結果、大幅に修正を余儀なくされる。B系列が書き始められるのである。『プラエアンブラ』、『エクスペリメンタ』、『オリンピカ』が。A系列は全面的に放棄されたのであろうか。

《炉部屋》における《一なる学》＝《驚くべき学問》が数学—自然学（外なるそれと内なるそれ）—超自然学＝「形而上学」から構成されていたことを想起する必要がある。

《一なる学》について全体的、一般的に語るのが『プラエアンブラ』であろう。それゆえA系列の「諸学一般の考察」は発展的にこの部分に吸収されることが予想される。そしてこの「考察」の例示の役割を持たされていた「代数」もまた『数学の財宝』に変身することが。《驚学》の総論のみでは、無名の青年の著書として、説得力を欠き、単なる大風呂敷と解される恐れがある。それゆえ《驚学》のサンプルであり、同時に基礎学でもある数学の成果を付することは、賢明な戦略であろう。この発想は『方法序説』と『三試論』の関係に似ている。

外なる自然学は、純粋数学的部分を『財宝』に送り込んだ後の『パルナッスス』の残余を当然含むであろう。

内なる自然学、靈魂論＝心理学は『エクスペリメンタ』。

超自然学は自然全体を論ずるから、『オリンピカ』は『デモクリティカ』を不用にするであろう。

以上のコンテクストを念頭に、引用された箇所の注解をこれから試みたい。

* * *

いたからである。

確かにデカルト自身の『立体の基礎』にはカバラ主義の片鱗すら見出すことは困難である。しかしそのことは、彼が純粋に数学的合理的要素とカバラ的不純物を峻別し、前者のみを摂取して、後者を否認したことを意味しない。というのも、彼は、『基礎』とほぼ時期を同じくすると思われる数学的断片において、『ドイツ人たちのカバラ』とその不思議な生産性に驚嘆しているかのような印象を与える記事を書いているからである²⁴⁾。

『基礎』において、デカルトはカバラを積極的に否定したというより、この手法が彼には不可解であったから、彼本来の「合理的」方法でファウルハーバーの着想を基礎づけ直した上で、発展・継承する以外になかった、というのが真相であろう。いずれにせよ、カバラ的数学、カバラの普遍学＝薔薇十字的知は《その土台について彼が今まで知る機会を得なかった》学問である、そのことは間違いない。そしてカバラ的数学が一定の生産性を示した以上、薔薇十字の普遍学をも、詐欺的なものとして、頭から退けるわけにはいなくなってしまったのである。こうしてデカルトの薔薇十字探索が始まる。

探索の開始は、当然、薔薇十字についてのより詳細な情報の獲得であったろう。X氏はどれだけのものを提供できただろうか。ファウルハーバー自身が『数学の奥義』（1615年）によって薔薇十字との接触を求めていることを明かしたであろうか。いずれにせよ、X氏に可能な唯一の応答法は、薔薇十字文書を貸与することでしかなかったろう。今日判明している限りでは、薔薇十字運動は実在したが、薔薇十字団そのものは架空だったのであるから。

事態の推移の正確な復元は困難であるにせよ、『炉部屋』において薔薇十字文書の集中的読書があったとする推測は、1619年11月10日夜の《夢》に『クリスティアン・ローゼンクロイツの化学の結婚』や『哲学の恍惚』と酷似するイメージ群および連関を突きとめたアルノールの分析によって、裏付けられるように思われる。

しかし、他方で、これらの読書がデカルトの好奇心を満足させたとも思えない。なぜなら、それらは、『名声』や『告白』の薔薇十字基礎文献を含めて、普遍学＝知恵を漠然と約束するだけであって、その実体を認識させるには程遠いからである。

この点で、薔薇十字情報が、デカルトに対して単に探索の動機として働いただけではなく、彼の《競争の衝動》を惹き起こしたとする、バイエ証言⑤は貴重である。

デカルトが、いかなる問題であれ、その解を他人に求めるより、先ず自らの力に訴える傾向を有することは、拙論「青年デカルトの知的冒険」（紀要 No.45）におけるベークマンとの「共同研究」の検討が証していることである。

その上、カバラに一定の評価を与えているにせよ、デカルトがこれを理解すること、従ってこれに共感することからは遠いという事情を無視できない。

デカルトのこれら二つの傾向が合流するとき、彼は彼流に、すなわち「合理的」方法で普遍学＝知恵を探求することに向かわなかったはずはない。

薔薇十字こそ学院以来再び知識と知恵の一致の可能性へとデカルトを目覚めさせる刺激となったのである。しかし、それと同時に、薔薇十字とは全く異なる根拠——『図形数』と『基礎』の関係を思い出して欲しい——の上に普遍学を構想する機会を与えたのでもある。

このように解するとき、初めて、『夢』をも含む『オリムピカ』が、表層的には薔薇十字と近似しているにもかかわらず、その風土において全く異質であることに納得が行くというものである。

要するに、薔薇十字はデカルトの《驚くべき学問》の構想に刺激を与えながらも、その根本に

恐らくはその人物の推奨においてであろう。しかし本の貸借関係が成立するのは、ある程度持続的な交際関係が前提される場合、とりわけ予想される場合であろう。従ってこのような関係は、デカルトの旅行中によりも、相対的な定住期に生じたとする方が自然である。するとブレダ滞在期か《炉部屋》の時期か、そのいずれかとなる。前者であれば、ベークマンが問題の貸し主ということになるが、彼の『日記』にはファウルハーバーの名はない、その全体を通じて。《炉部屋》の時期にこの人物を求めるしかないのである。

デカルトが《炉部屋》で交わる機会を有した、恐らく、少数の人々のうちには、ファウルハーバーの『図形数』を所有し、従って数学に相当程度精通していた《同学者》がいた蓋然性は、極めて大きいと言わねばならない。

この人物Xはファウルハーバー自身であろうか。《炉部屋》が、従来の主流説どおり、ウルム近郊にあるなら、そうであり得る。しかし《炉部屋》＝ウルム近郊説は、田中仁彦氏の仏語論文「炉部屋はどこに」の綿密な検討によって、ほぼ完全に崩れたとしてよい²¹⁾。氏が示唆するようにノイブルグ公国のどこかにあったとすべきである。それゆえ、X＝ファウルハーバーの等式は成立しない。

しかしXは、コスタベルの示唆するように、ファウルハーバーの弟子であったかもしれない²²⁾。だが、それ以上に注目すべきは、Xがペトルス・ローテンの『哲学的算術』やベンヤミン・ブラメルスの著書の所有者兼紹介者であった可能性である。

ここでわれわれは、今までは放置しておいた問題、『思索私記』の中の「パルナッスス」的断片は全てブレダ時代に記されたものかどうかというそれ、を避けて通ることは出来ない。

先ず、《炉部屋》において『パルナッスス』に加筆が皆無であったとするのは不自然である。《炉部屋》は何よりもベークマンと約束した「機械学—幾何学」の論文に再着手する機会を意味したのだから。

それでは、『パルナッスス』の一体どこにブレダと《炉部屋》の境界を求めるべきか。

デカルトは、4月23日のベークマン宛手紙で、新コンパスとそれに密接な《角の等分問題》や《三次方程式の問題》そして《その他のこと》(＝《全く新しい学》)の考察に《疲れ切って》しまい、もはや《何かを発見する力》は残っていない、と告白している²³⁾。だからここで挙げられている種類の問題に関係している断片までが、一応、ブレダ期のものと考えてよい。それはAT版241頁7行目で終わる。その直後に来る断片は、突然、今まで全く問題にされなかった、三角数＝図形数の二乗の考察に移行する。続く断片は、確かに、新コンパスに関係する断片ではあるが、ローテンとブラメルスの名と共にである。これらはファウルハーバーの刺激と一緒に他の二人のドイツ人数学者の名前ももたらされたことを暗示していないだろうか。そして、少なくとも、ブレダ時代には無理だと思われる《四項を持つ完全な(三次)方程式の一般的な規則》が定式化されるのもこれらの断片以降なのである。

われわれの分析が正しければ、《炉部屋》における『パルナッスス』の再開は、ドイツ人数学者たちとの著書による接触を以て始まったのである。だからこれらの書物を媒介した人物Xは、デカルトの《関心を逸らす交際》を強いるどころか、反対に、彼の関心を強化する役割を果たしたわけである。

ところで、ドイツ人数学者たち、とりわけデカルトがその独創性を最も高く評価した——だからこそ『立体の基礎』が書かれたわけだろう——ファウルハーバーの著書は、そのまま薔薇十字へと通じていたのである。なぜなら、この優秀な数学者の『図形数』における主要な関心は、カバラ主義の応用にあったが、薔薇十字の普遍学もまたその基礎の一つをユダヤ神秘主義に置いて

それなのである。それゆえ薔薇十字へ彼の関心を向かわせた《篤学者》は、何か彼と共通の興味を有し、それとの延長上にこの結社を位置づけることの出来た人物でなければならない。

果たしてこのような条件を有する《篤学者》にして《同学者》との交際は、《炉部屋》のデカルトに可能だったのであろうか。

この可能性を示すために、《炉部屋》をサロンとする必要はない。

第一に、《炉部屋》は下宿家かそれに近い長期滞在を許す宿屋にあったのだろう。そうであれば同宿人がいるわけであり、その中に何かについてデカルトと同好の士がいたということはある得る。

第二に、《炉部屋》に五、六ヶ月——1619年10月—1620年2ないし3月——の間、閉じ籠もり切りでいたはずはないから、外での偶然的《出会い》も排除できない。ベークマンと知り合った場合のように。

こうして薔薇十字情報の提供者が《篤学者＝同学者》であるべき理由とそのような人物との《炉部屋》における接触可能性を提示することは出来るわけだが、更に他のところからより積極的にこのような人物Xの存在を示唆する状況証拠もないわけではない。

ファウルハーバーの名前が浮上する。

リップシュトルプがこのウラムの数学者とデカルトの出会いを報告している¹⁴⁾。しかし残念なことにこの出会いの状況、時期、内容の詳細（エピソードはベークマンとの出会いのその二番煎じ）が極めていい加減なために、出会いの事実そのものすらも疑う史家は多い。しかし、他方で、ファウルハーバーの『図形数あるいは新しい未聞の不可思議な術に基づく解析的数論』（1614年、フランクフルト）とライプニッツ写本によって知られるデカルトの『立体の基礎の演習』との間の密接な関係、父子もしくは継承発展のそれは、プルエ¹⁵⁾以来ミロー¹⁶⁾を経てコスタベル¹⁷⁾に至るまで、その道の史家たちによって確証されている。一般に時代が新しくなるにつれてデカルトの独創性が益々高く見積もられていく傾向はあるにしても。

それゆえ、少なくとも、デカルトがファウルハーバーのこの本を読んだことは間違いない。一体、いつどこでこれを彼は読んだのであろうか。

いつの決定は『立体の基礎』の執筆年代による。ミローはそのコサ表記の故に1619—20年冬、しかもその初期とする¹⁸⁾。コスタベルもほぼ同じ理由——クラヴィウス、そしてまたユークリッド圏内にデカルトがいるというそれ——ながら、リップシュトルプのファウルハーバー—デカルト、1620年夏、出会い説を尊重して——この優れた史家は数学—科学史以外のことに限っては、デカルト史家たちに遠慮し過ぎる傾向がある。しかし彼の抵抗のわずかなしるしは、デカルトとファウルハーバーの関係を論ずる際の、《ファウルハーバーとその弟子たち》という表現に見られる——、1620—21年冬とする¹⁹⁾。だがコスタベルは積極的に反対しているわけではない。それゆえファウルハーバーの『図形数』をデカルトが読んだ時期の下限を1619—20年冬に置くことは、少なくとも専門家たちが否認はしない線であると考えてよい。

すると上限が問題である。ところでデカルトは《本というものを自ら所有したことはない》と後にビュルマンに述べている²⁰⁾。この証言の信憑性は、デカルトのテキスト全体においてこれと矛盾する発言がないこと、同時代の他者の証言にもないことから問題はないように思われる。むしろ《書物による学問》に見切りをつけて以降のことではあるが。そのとき以来、デカルトが本を読むのは、他人から借りて、しかも多くの場合、その所有者から勧められてのあげくのことである。

それゆえファウルハーバーの著書をデカルトが読んだのは、本来の所有者からの借用、そして

デカルトが《あらゆる学問を軽蔑する》ことをやめるのは、《炉部屋》において数学—自然学をその一部に含む《一なる学》=《驚くべき学問》の《知恵》との一致を確信してから後のことである。

従って薔薇十字の報に接したのは、《炉部屋》においてではあるが、《発見=夢》以前である。

それだからこそ薔薇十字の学者が《あらゆることを知っていて、人々に新しい知恵》を《約束する》存在だと聞いて（②による。②は『研究』によっている。加えてボワソンも『研究』を要約した箇所で、《彼らはあらゆることに通じている》¹²⁾という表現を用いている）、デカルトが衝撃を感じたのも半ばは納得がいく。

「半ば」というのは、万知と知恵を約束する人々にはこと欠かないからである。われわれが見てきたように、そのような人々、例えばルルス主義者に対するデカルトの応じ方は、彼らの原典やその権威ある注解書すら繙かず、いくら信頼する友であるとはいえベークマンの判断に従うという消極的なものであった。それはこの種の人々の原型、学院の教師たち、において既にそのような約束が当てにならぬことを身に染みて感じていたからであろう。それゆえ薔薇十字に対するデカルトの特別な反応の理由、大方はやはりべてん師たちかもしれないと思いながらも、なおそこには《自分の知る機会のなかった土台を有する学》と《知恵》の結合の可能性があるかもしれないと動揺した理由の解明こそ肝心である。

*

*

*

そこで《誰》から、あるいは《どういう人》から薔薇十字情報を得たかということが問題になる。これについて①の与える《篤学者たち》という情報もしくはバイエ苦心の推測（この場合には単なるまぐれ当たりかもしれないが）には傾聴すべきものがある。というのも③が示唆するように、薔薇十字の噂そのものは《炉部屋》以前にデカルトが耳にしていたということは大いにあり得るからである。しかし単なる噂や贅辞では、まともや新しい詐欺師の出現かということですまされてしまう公算の方が強い。この点で《噂》に対して真剣な関心を持たせる媒介者が必要になる。

バイエの証言を信じない現代の研究者は、薔薇十字文書の流布、そして薔薇十字運動と密接な反カトリック—ハプスブルグの宗教—政治運動の實在に訴えて、デカルトのこの秘密結社に対する関心を説明しようとする傾向が強い。

しかし学院を出てからのデカルトの書物に対する不信を、彼らは過小評価しているように思える。彼は書物より人間を尊重し——これが《世間という大きな書物》の読み方というものであろう——、従って書物に関心を持つとしても、信頼できる人間の助言に従ってであること、ルルス—アグリッパの書物とベークマンという人物に懸けられた比重の大小が示す通りである。薔薇十字文書に関しても同じである。これにデカルトの関心を向けるためには《篤学者》の存在が必要なのである。かくしてデカルトと薔薇十字の接触をブレダ滞在時代に求めるのは無理である。ベークマンがこの運動に全く関心を示さないからである。むしろデカルトの同時代のテキストにもその痕跡を見出すことは出来ない。確かに、一般に、沈黙は関心の否定ではない。しかし首尾一貫して私的文書にまで沈黙が見られるとき、それは無関心のしるしと解されるべきであろう。同じ理由から世人の関心を惹かなかつたはずのない政治—宗教運動に対する沈黙も無関心の証拠と見なされるべきである。ベークマンとデカルトは、彼らの直ぐ身近に生じたオランダ新教徒の分裂と抗争すら無視したのだから、より遠いファルツ公を担ぐ運動にどうして関心を抱いたはずがあらうか。

竹田篤司氏が洞察した通り、青年デカルトはエゴティストなのである¹³⁾。しかも書物を読まぬ

バイエは、一方では、『序説』にない情報、《彼は人文学より哲学をいっそうの情熱を籠めて愛していた》(t. I, p. 26)、を『研究』から得ると同時に、他方では、デカルトが学院を出る頃に《書物を放棄し……文字の研究に全面的に不信の念を向けるに至った》(ibid., p. 34)という一見信じ難い事実の典拠として、『序説』と共に『研究』をも挙げている。

『序説』、『研究』の併用は問題のこの時期の記述においても当然継続されたわけだろう。但し薔薇十字の件は『研究』の独占記事だから、スイッチを切り替えるだけですむはずである。しかし、もし『研究』に《炉部屋》もしくはそれに相当する時期に著者が薔薇十字の報に接したという記述があったとすればどうか。『序説』と『研究』の平行もしくは補強の蜜月関係は終わり、両者は矛盾する。なぜなら『序説』は《炉部屋》を完全な《孤独》の状態として描いているのだから。ここに「良心的な」伝記作者バイエの苦しい辻つま合わせが始まる。《炉部屋》は一般人には閉ざされていたが、篤学者には開かれていたと。この技巧的言辞はもちろん『研究』の著者の与り知らぬところである。彼はまだ『序説』を夢にも知らない時期にいるのだから。それゆえこの矛盾の解決に始まる有機的記述、すなわち①全体の典拠をバイエは『研究』として挙げるわけにはいかなくなってしまったのである。

以上の議論は『研究』に《いつ》の言及があったと仮定した場合、何故①には典拠が示されていないのかという問いに関係するものであった。今度はこの仮定を事実と見なすべき理由を説明する番である。

グイエは《炉部屋》が《サロン》化されているがゆえに信じ難いと言う。しかし、上に述べたように、バイエもまた『序説』の記述に反する《サロン》化などしたくはなかったのである。敢えてそれをしたとすれば、バイエがデカルトの薔薇十字との接触の開始を《炉部屋》の時期とすべき強力な理由を有していたからに他ならない。しかしわれわれが知る限り、この説に固執すべきバイエの個人的事情を、それが『研究』に述べられていたからということ以外に求めることは出来ない。それゆえ、デカルトが薔薇十字を《いつ》から知ったかという核心的な事実そのものに関しては、①は『研究』に基づいて証言していると考えてよい。

次に問題にすべきは、《炉部屋》のどの段階でデカルトが薔薇十字の報に接したかということである。

余白注のある信頼できる証言、④・⑥によれば、《あらゆる学者》、《あらゆる学問》を《軽蔑》していた時期においてであり、バイエの敷衍であり得る⑥によれば、《真理探求のために取るべき手段に関して最大の困惑を覚えていた時期》である。

これら相互に補強し合う証言は《いつ》の限定をもたらししてくれるというより、われわれがせっかく辿り着いた《いつ=炉部屋》説を覆してしまう怖れはないのか。なぜなら《炉部屋》においてデカルトは既にベークマンと数学—自然学を知っていたはずだからである。オランダの友人と彼が代表する学問をも軽蔑していたということがあり得るのだろうか。あり得ると言わねばなるまい。この可能性に驚くのは、デカルトが、学院時代、愛好していた《数学》すら《軽蔑》していたことを忘れているからである。その理由はこの学問の確実性が《知恵》と結びつかないからである。数学が自然学と結合したからといって、それが依然《知恵》と統合されていない以上、愛好の対象、上等な気晴らし、遊びでしかない。ベークマンとのこの差異こそ「機械学—幾何学」の著述に専念できず、この年長の友を苛立たせる理由なのである。それゆえわれわれの見るところでは、デカルトが、研究半ばで、旅に出かけてしまう理由ともなっているのである。《全く新しい学》といえども、それは精々数学であるし、自然学にまでしか射程距離は及ばないからである。

土台について彼が今まで知る機会を得なかったものがあるかもしれないが故に、恥すべきことになろうから。

⑦《それゆえ彼はこれら新しい学者たちの誰かを探し出すことを自分の義務とした。彼らを自ら親しく知って彼らと対話をするために》⁸⁾。

この後、バイエは薔薇十字についての説明に話を転じ、だいたい間を置いた後、デカルトの薔薇十字探索の結果を報告する。

⑧《(余白に『研究』第5節)。この結社に属すると名乗るものを、あるいはその疑いのある者すら誰ひとり彼は発見することが出来なかった》⁹⁾。

⑨《……(余白に『研究』)それゆえ、数年後、彼は、自分は薔薇十字については何も知らぬ、と何のためらいもなく言うことが出来た》⁹⁾。

⑨は別の文脈の中でラテン語原文の提示によって確認されている。

⑨'《Necdum de illis quidquam certi compertum habeo (私は今なお『研究』執筆の時点で) 彼らについては何も確かなことを知らないでいる)》⁹⁾。

これらバイエの証言は、いつものことながら、どこまでがこの伝記作者の推測であり、どこが原作者のテキストの翻訳であるのか、判別しにくい。それゆえ研究者を悩ます、あるいは彼に活躍の機会を与える、そういう性質のものである。いずれにせよ慎重に吟味していく必要がある。

まず、①はデカルトがいつ薔薇十字に関する情報に接したかを述べている。それによると、1619—20年冬、すなわち《炉部屋》の頃、そこを訪れることを許された篤学者たちとの会話を通してだということになる。

しかし、グイエはまだ無名の青年士官の《炉部屋》を《学問や文芸について語られるサロン》とすることに抵抗を感じ、これをバイエの脚色としている⁷⁾。このように一度①の信憑性に疑問符がつけられると、《いつ》の問題に関しては様々な説が可能になる。

グイエ自身はデカルトが《ドイツ旅行中》に薔薇十字情報を得たとする⁸⁾。ロディスーレヴィスはブレダ滞在中に既にこの結社についてデカルトが知っていた可能性を認めるが、確言することは避けている⁹⁾。コーエンは恐らくそうだとし¹⁰⁾、田中仁彦氏は端的にそうだとし、デカルトの旅を薔薇十字を求めてのものだとまで言い切る¹¹⁾。

今ここでは諸説の根拠に立ち入らないが、いずれも説得力の強弱はあるにせよ、状況証拠にしきに基づいて、デカルトの直接的証言に依ってはいないという点では変わらない。

われわれは改めて『良識の研究』そのものに《いつ》の言及がなかったのかと問い直したい。『研究』には間違いなく著者と薔薇十字との関係の《終わり》は示されていた(⑨ないし⑨')。それゆえ《始まり》も明示されていたと考えるべきではないのか。もしそうだとすると、『研究』の現物を見ているバイエの証言は、現代の研究者の臆測より圧倒的な強みを有することになろう。

①には確かに「余白注」はない。「余白注」は、バイエの場合、典拠に忠実な一文の横か、比較的長い紹介においては、頭に來るのが普通である。従って①がバイエ自身の推測ないしは「つなぎ」の文である可能性は否定できない。しかし、逆に、「余白注」にないからといって、①が『研究』と無関係にバイエの想像によって書かれたとも速断できないのである。この場合、『研究』はラテン語で書かれているから、それに忠実な訳を与えた箇所にもみ典拠が与えられたとも考えられる。実際、①は『研究』によっているとしても、これから述べる理由により、バイエの潤色ないしは工夫があったことは否定できない。

バイエは、デカルトの学院時代を再構成する際に、『序説』の記事を大いに活用している。ところで、その際に『研究』も併用された形跡が濃厚に残っている。

てよいように思える。

§4 薔薇十字

第一節 『良識の研究』

いよいよデカルトと薔薇十字の関係を正面切って論ずる時が来た。

彼が青年時代の或る時期、薔薇十字に強い関心を抱いたことは、今は失われた『良識の研究』という名のデカルトの草稿に立脚したバイエを主とし、ポワソンを従とする証言によって間違いない。

『良識の研究』は恐らく1623年頃に書かれたラテン語の〔原題 *Studium bonae mentis*〕未完に終わった作品で¹⁾、バイエは次のように説明している。《これは、われわれが有している知への欲求について、諸学について、学ぶための精神の素質について、そしてまた知恵すなわち知と徳を、意志の諸機能を悟性のそれらと結び付けつつ、獲得するために守らねばならない順序について考察したものである。彼の意図は全く新しい道を切り開くことにあった。しかし彼は、自分自身のためにのみ、そしてこの論文を宛てたムセウス *Museus* の名の下にある一友人のためにのみ労しているのだと、称していた²⁾。

明らかに『プラエアンブラ』の考察を継承する一方、『精神指導の規則』に、更には『方法序説』に先駆ける位置をこの作品は占めている。特に『序説』との関係で注目されるのは、『研究』もまた自伝的記述を含んでいたと思われることである。そしてその種のテキストの中で薔薇十字との接触が述べられていたのである。

バイエの報告を再現しよう。

①《デカルト氏の孤独はこの冬の間〔1619—20年〕常に完全なものであった。とりわけ彼の話相手に全くなれない人々に対しては。しかしこの孤独は篤学者たちを部屋から締め出すほどではなかった。彼らは学問について、あるいは文芸の消息について話すことができたから。これらの人々との会話の折りに、彼は、しばらく前にドイツで「薔薇十字兄弟団」の名の下に組織された、学者たちの団体のことを耳にしたのである。

②《(余白に。カルテジウスの本、『良識の研究について』第5節、草稿)。人々は彼にこの結社について褒めそやした。彼らはあらゆることを知っていて、人々に新しい知恵、すなわちまだ発見されていない真の学を約束しているのだという。

③《デカルト氏は口々に教えられたこれら並々ならぬこと全てを、この新結社がドイツ中で評判になっていることと結び付けて、気持ちが動揺するのを感じた。

④《(余白に、同上)。あらゆる学者を真にその名に価いするものを誰ひとり知らぬがゆえに、一般に軽蔑すると公言していた彼、その彼が自分の判断は早まっていたのではないか、根拠がなかったのではないかと自分を非難し始めたのである。

⑤《彼は自分の内に競争の衝動さえ生まれるのを感じた。これら薔薇十字の消息が、真理探求のために取るべき手段に関して、最大の困惑を覚えていた時期に到来しただけに、彼らに対するライヴァル意識を一層駆り立てられたのである。

⑥《彼は彼らについて無関心であってはならないと思った。(余白に『ムサエウス *Musaeus* のための良識の研究』同所)。なぜなら(と彼はその友人ミュゼ *Musée*〔羅名の仏訳〕に言っていた)、もしこの人達が詐欺師であったなら、彼らに人々の善意を食物にして得るのにふさわしくない名声を享受させておくのは正しくないし、もし彼らが知る労に価いする何か新しいものをこの世にもたらしたのであれば、彼があらゆる学問を軽蔑しようとするのは、学問の中にはその

しかし、それなら何故弁証術に過ぎないルスの「術」をあれほど意識してデカルトは《全く新しい学》について語らねばならなかったのか、ということが改めて問題になる。それは「術」と《新学》の間に相似性があったからである。

「術」は事物＝概念の類別をその本質としている。《新学》もまた類別の上に成立するのである。これは、われわれの解釈によれば、《算術＝数論》の《幾何学》への還元を試みを含む一種の《新幾何学》なのであるが¹⁰⁾、いずれにせよ、この《新数学》はそれの扱うと予想されるあらゆる問題を類別＝細分し、その区画された単位毎に解法（解不能の判定をも含めて）の一般処式を与えようとするものである。着想の相似性は明白である。それどころか、「術」のベークマン的理解＝説明が《新学》の構想のヒントとなったとすら考えられる。

しかし「術」と《新学》の相似性はより本質的なところにまで及んでいる。なぜならデカルトの《新幾何学》もまた一種の「弁証術」の性格を兼ね備えているからである。

別の所で見たように¹¹⁾、デカルトは「自由落下の問題」を契機に、幾何学が自然の言語であるという理解、少なくとも感触を得た。他方、彼の知っている限りでの数学がどれほど不備であるかということ、特に曲線の処理に直面して、痛感した。この二つが合流するところに《新学》の構想が出現する。《新学》はそれだけでは自然についての実質的知識を与えるものではないが、それに先立って《自然の「言語」の或る種の配列》を通して自然に関するディスクリールの論拠を予め確立しておく試み、要するに自然の「弁証術」なのである。

このような事情、深い相似性のゆえに、逆にデカルトは「術」と《新学》の差異を強調せざるを得なかったわけである。尤もD Iでは《違う》ということだけが言われていて、差異が具体的に述べられているわけではない。しかしそれも当然である。D Iは不特定の読者を対象としたテキストではなく、ベークマンに宛てられた書簡だからである。デカルト－ベークマンの共通理解の上に《違う》ということが発言されたとすれば、知の生産性と射程距離においてであろう。生産性に関していえば、《新学》は何よりも量の学として発見を前提に成立している。そして自然の「弁証術」としても《新学》以前に、数学は、不備な姿のまま、既に新知識の獲得に役立っているという実績を有している。この意味で、《新学》は、正確には「弁証術」というよりベークマンの解する論理学に近いのである。しかしデカルトは、どれほど野心的であろうと、《新学》を「普遍学への鍵」とするほど大それてはいない。《新学》はオルガノンであるとしても、自然学のそれではない。こういった具体的差異をデカルトが考えていることは、ベークマンの直ちに了解するところであつたらう。

以上の通りであつたとすれば、D IIの老人の言うところの「術」の奥義の可能性にデカルトが何故あれほど敏感に反応したか、その心理を推測できるように思う。彼には、ルスの術は弁証術に過ぎないという認識を原典においてではなく伝聞においてしか有していない弱味がある。これが論理学ではないことを文字通り自分の目で突き止めたわけではないのである。それが友人に再保証を求める動揺として働いたのであろう。B Iをデカルトが受け取ったかどうかはわからない。しかし、仮に受理しなかったとしても、そのことが深刻な動揺をデカルトにもたらしたとは思えない。もし彼が友人の判断に根本的不信を有していたとすれば、その判断の是非の検討を同じこの友人に委託するなどということがあり得るだろうか。彼は初めから「術」の奥義の可能性について否定的な答えをベークマンから期待していたのである。

いずれにせよ、ルスの「術」から抜け目なくデカルトが自分の《新学》のヒントをもらったにせよ、これを「普遍学への鍵」として受けとめることからは遠く、万一のその可能性を認めたとしても、それはオキュルティズムへの共感とは全く別の根拠からなされたものであると結論し

パ自身から、ついこの間、その気がおありだったなら、あなた御自身でそれら〔＝「術」の奥義を開く鍵〕を把握することが出来たでしように》(B I)。尤もデカルトはこの折りには食指を動かさなかった(彼がルルスや『オカルト哲学』の著者に関心があったとすれば、これも解せない態度である)。友人の判断をよほど信頼していたか(この証拠はD IIの依頼そのものに窺える)、それによって自分の前々からの認識を再認することで満足したのであろう。

こう見てくると、B Iはルルスの「術」=《弁証術の主題の或る種の配列》というデカルトの理解の注解として読むことが可能である。

デカルトの依頼=質問に対するベークマンの返事は、《あなたにお答えすべきことは何もありません》という甚だ素気ない書き出しで始まっている。ロディス=レヴィスはベークマンの返信に《苛立ち》を嗅ぎとっているが⁸⁾、それは当たっているように思われる。というのもデカルトの依頼=質問の要旨は、あなたの『注解』の理解は本当に正しいのかどうか一抹の不安がある、だからもう一度当たり直して見落としがなかったかどうか確かめてくれ、ということなのだから。ベークマンは、自分の理解力を疑われたために、腹を立てたのである。

この「術」についてはいつかあなたにお話したことで尽きている、だから何も改めて言うべきことはない、それでもこう言い切ってしまったのでは実も蓋もないから、もう一度繰り返すことにする。これがベークマンが返信に籠めた意味である。それゆえB Iの『注解』によるルルスの術論は、前年末のいつかこの本を前にして二人の友の間で持たれた対話におけるベークマンの発言の再現であり、この「術」に対するデカルトの理解の敷衍なのである。

B Iによれば、ベークマンは「術」が弁証術のための工夫としてはなかなか優れているものであることを一応は評価していると考えてよいだろう。しかし、他方で、それは決して知識を与えるものではなく、むしろ知識を前提して成立するものであること、それゆえ知識の伝達ではなく、知識の探究を目指す者には役に立たないどころか、《実質のあることの省察》から精神を逸らす有害なものに変わる危険性を有することを、彼は指摘している。

B IIは、B Iより前に書かれたのか、後にか、わからない。われわれは、《苛立ち》の余り手紙ではあのように大見栄を切ったものの、多少心配になって、『注解』を、一・二時間しか費やさなかったにせよ、とにかく読み直し、自分の理解を再確認した性質のものを見たいが。しかしそれは枝葉のことであって、ルルスの「術」の評価がここにおいても一貫していること、そして「術」と学の関係がより明示的に述べられていることに注目するのが肝心である。

ベークマンは「術」が諸学に代わり得るものではないことをはっきり断定している。すなわち諸学に内実を与えるためのオルガノンとはなり得ないと。こうして「術」は「普遍学への鍵」であるというルルス主義者の主張を十分に意識しつつ、彼はこれを明確に否定する。彼が「術」に代えて期待するのはラムスの論理学である。今日の目から見れば、ラムスの論理学もなお弁証術=修辞学の系譜に属するように思えるが、そのことにはここでは立ち入らない。いずれにせよ、ラムス主義からのルルスの術への批判は、アリストテレスの「論理学」に対するそれと共通の基盤の上になされていることが注目される。「術」も「論理学」もいずれも発見の方法ではなく、整理・伝達のそれに過ぎないとされているのである。

『方法序説』の一節、《まだ若かったその頃、……論理学についていえば、その推理式およびその大部分の教則は、自分の知らぬことを学ぶために有用であるよりは、むしろ自分の知ることを他人に説明するために、あるいはルルスの術の如く、自分の知らぬことを判別することなく語るために有用であることに気づいた》⁹⁾ もまたベークマン=デカルトの「共同研究」の成果の一つだったと考えてよいのではないか。

ものに合致するあらゆるものを見てとることも可能になり、かくして語り得ることを全て集めたいと思う者は何一つ見落とすことなどあり得ない。全く同様に「他人の話を」評価することも出来よう。ラムスの論理学のとは目的が全く異なるのである（この論理学はルスの術によって廃絶されるように見えるかもしれないが）。すなわち短術によって組合わされたこれら全ての事物は、相互に関係し合っていることを示し、更にはあるものが他のものとどのように関係し合っているかを、発見の十の場に従って、示してさえいる。かくしてルスの術は諸学の範疇ないしは体系の如きものであろう。しかし論理学は個々の学問に精通しているがゆえに、事物の血縁性を示すのである。学問の諸分野が、それゆえ、ルスの術に代わって存在するが、ルスの術が論理学に代わり得るものではないことは明白である》（『日記』117枚目裏37行—118枚目表9行。AT版はその位置からこれが5月2日と14日の間に書かれたと推測している）⁹⁾。

*

*

*

D I, IIは青年デカルトがルスを強く意識し、その術に並々ならぬ関心を有していたことの証拠として持ち出され、コーエンに至っては、若い見習い士官がこの術に《取り憑かれていた》とまで見ている¹⁰⁾。ここからデカルトのオキュルティズムへの共感の事実を引き出すことは容易であらう。

確かにD Iによれば、デカルトがルスの『短術』を十分に意識していたことに疑いの余地はない。さもないと彼が自分の《新学》を語るのにどうして『短術』を引き合いに出す必要があるだろうか。

だが、デカルトがこの時期ルスの術をどのように見、どのように解していたかを、誰も問わないのは不思議である。彼はルス主義者のようにこの術を普遍学への鍵と解していたのだろうか。そして《新学》で以てルス主義者の野心に対抗しようとしたのであろうか。

当時のデカルトのルス理解を知る手掛かりは、実は、D IIのうちにある。

D IIによれば、少なくともドルドレヒトで一老人に出会う以前、従って《全く新しい学》の構想をミデルブルグの友に伝えた時期には、デカルトがルスの術を《弁証術の主題の或る種の配列》をその本質とするものと認識していたことは確かである。そして例の老人の自慢の内容もこの認識の正しさを確認するものであった。ただ、この老人がこの有名な「術」はそれ以上のものを奥義として有しているのだとほめかしたので、ベークマンにより詳細な情報を求めるに至ったのである。老人の付言が《無知な者の賞讃》を招かんがためのものではないかと半ば疑いながらも。

いずれにせよ、老人の付言を直ちに評価できなかったことは、デカルトがルスの「術」をこの中世人やルネサンスのその注解者アグリッパの書物から直接理解したのではなく、グイエが指摘するように、又聞きによってのみ認識していたことを示唆する¹¹⁾。実際、彼はこれらの書物を持っていない（ルスの《取り憑かれていた》とすれば解せない事実である）。だからそれらを所有していることが確実なベークマンに老人の付言の評価を依頼するのである。

それでは、デカルトは、『短術』が弁証術のためのものだという、ルス主義者の目から見れば極めて控え目な、あるいは慎まし過ぎる、情報をどこから得たのであろうか。学院での反オキュルティズム啓蒙書から、あるいはフランソワ神父からであらうか。何とも言えない。ただ、確実なのは、ベークマンもルスの「術」をそう解していたということである。そしてベークマン自身はその理解を、たとえ《斜め読み》に過ぎなかったにせよ、アグリッパの『注解』から、《2, 3年前に》、直接得ていたのである。それどころか、オランダ人医師と見習い士官が「共同研究」をしていたときに、前者は後者にも『注解』を読んでもろと勧めさえしたのである。《アグリッ

デカルトのルルス発言の真意をよりよく理解するために、補助資料としてペークマンのDⅡに対する返信および日記から関連箇所を引用しておきたい。

BⅠ：《……ところであなたにお答えすべきことは何もありますが、それでもあなたの書信を拝受したことを示すために、以下少々書き足しました。

《あなたのお手紙によれば、ドルドレヒトで学識豊かな人物にお会いになったとか。しかしこの男のことを、彼の誘示するルルスの「術」の馬鹿の一つ覚えのゆえに、学識あると呼ぶ気にはなれなくなるでしょう。アグリッパの『注解』を精読して、例の老人言うところの鍵を探し出してくれとの御依頼です。これらの鍵によってあの「術」があらわにされるのだが、アグリッパによってもルルス自身によってもそれらは敢えて付け加えられなかった、この「術」を読者がむやみに振り回すのを怖れて、ということでしたね。もちろんあなたはとりわけ私の才知を信じて下さいますから申し上げますが、この「術」のうちに何かが隠れ潜んでいるとしても、『注解』をもう少し丹念に読む気になれば、私の目を逃れることは出来ないでしょう。そして確かに、あなた、私の並ならぬ友、のおっしゃることに聴き従いましょう、もし時間の乏しさのゆえにそのことが妨げられないのであれば。事実、それほど長くは、あなたがコペンハーゲンに御滞在できないのではないかと思いますし、近頃、手紙は宛先に届く前にしばしば途中でぐずつくことがありますから。

《その上、数年前にアグリッパのこの『注解』を斜め読みして、このことについて私が理解したことが私から消え去ってしまったのではないとすれば、これらの鍵は遠くまで探し求める必要はありません。というのもアグリッパ自身から、ついこの間その気がおありだったならば、あなた御自身でそれらを正確に把握できたでしょうから。すなわち存在する全てを彼は類の場に分割し、更にそれらのそれぞれを他のもの〔種〕に細分し、かくしてこれらの集合＝円のうちに類・種として含まれないものは何も考えられないようにします。最後に様々な集合＝円の間を相互に文字によって結合するのです。それゆえかくして、提出された主題が何であれ、あらゆる項の組み合わせによって、しゃべる時間をほとんど無際限といってよいくらい引き延ばすことが出来るでしょう。しかし（このように）語る者は多くのことがらに精通している必要があります。そして長くしゃべり過ぎる者は多くの馬鹿げたことやものの役に立ちそうもないことを言う羽目に陥ります。そして、結局の所、精神は完全にとりとめがなくなって、その全体が、何か実質的なことを省察するのにほとんど不向きになってしまうほど、記号や文字に縛り付けられてしまうでしょう。以上でこの件については充分だと思います、もしあなたが何か他のことをお望みでない限り》(1619・5・6, デカルト宛)⁴⁾。

BⅡ：《ルルスの『短術』は（アグリッパの『注解』の1時間か精々2時間の読書から私が結論できる限り）、次のような効用を持ち得るであろう。あらゆる事物の要点を簡潔に示すという効用を。すなわちそれはあらゆる事物を分けて、どの事物も分類の或る部分に還元できないものがないようにするのである。それゆえ事物は、先ず、六ないし七つの部分に分けられ、可能な限り、まとめられて、それぞれの部分は明瞭にそして効果的に相互に分離される。これら諸部分が個々に再び細分される。それぞれ九つの部分へと。便宜のために至る所で同じ数の部分を維持するのである。これらの部分をルルスは内項と呼んでいて、これは「術」の中で明瞭に説明されている。ところで、これら九つの部分のそれぞれを、各人の好むところに従って、任意の他の部分へと細々分することはさしつかえない。そしてこれらの部分を、彼は外項と呼んでいる。このようにあらゆる事物が分類されれば、あらゆる事物を組み合わせることは容易に出来、評価をすることも朝飯前である。そして三つないし四つの集合＝円を結合することが出来るから、あらゆる

§3 ルルスルッスの術

デカルトはブレダ滞在期にルルスルッスの術に言及したテキストも残している。彼のオキュルティスムとの関係を考える際に、このテキストの検討もなおざりにすることは出来ない。ルルスルッスは、ロディス・レヴィスの表現によれば、《普遍学＝オキュルティスム》の有力な伝令であるのだから。実際、この13—14世紀の中世思想家は、その普遍学—普遍宗教への関心のゆえに、フィレンツェ・プラトニスム、とりわけピコ・デラ・ミランドラとの共通性を示し、かくしてヘルメス＝カバラ主義の文脈においてルルス・ルネサンスとでも言うべき現象を惹き起こしていたのである。

先ず、問題のテキストを再現しておこう。

D I：《とにかく、私が何を企てているか、あなたに包み隠さず打ち明ければ、私はルルスルッスの『短術 Ars brevis』ではなく、全く新しい学を告知したいと考えています。この学は連続量であれ、分離量であれ、いかなる種類のものであっても、量のかたちで提示され得るあらゆる問題を一般的に解くことを可能にするものです。但しそれぞれその本性に従って》(1619・3・26, ブレダ発, ベークマン宛書簡)²⁹。

D II：《一昨日、ある博識な男をドルドレヒトの宿屋で見出しました。彼とはルルスルッスの『小術 Ars parva [Ars brevis のこと]』について語り合いました。彼は、この術を使える、しかも極くやすやすと、と自慢していました。彼によれば、任意の題材について一時間語り続け、更にもう一時間同じ事柄について論じなければならないのであれば、前のとは全く異なったことを見出し、かくして必要に応じて二十時間でも続けられるというのです。お信じになるかどうか、それはあなたが御存知でしょう。彼は老人で少々おしゃべりです。そして彼の博識は、当然のことながら、書物から libris 汲まれたものですが、脳の中にあるというよりは唇の labris 端にあると申せましょう。

《(冗談は)ともかく、この「術」は弁証術の主題の或る種の配列 ordo から成り立っていて、そこから様々な論拠 rationes が選び出されるのではないかと私が問うたところ、彼は確かに同意しましたが、更にこう付け加えました。ルルスルッスもアグリッパもその書物の中では鍵の如きものを明かさなかったのだ、しかしそれらは、この「術」の奥義を解明するのに不可欠なのだ、と。むろん、彼の言ったことは、真実を述べるためというより無知な者の驚嘆を得たいがためではないかと、疑わしいところがあります。

《とはいえ、本を持っていれば、調べてみたいところです。ところで、あなたはお持ちなのですから、お暇があれば、調べてみてくれませんか、お願いします。そしてこの「術」のうちに何か気の利いたものを見出せるかどうか、手紙にて教えて下さい。あなたの才知については完全に信頼申し上げていますから、あの老人が鍵と呼ぶ、残りのところを理解するのに必要でありながら、省かれている点が、もしあるとしての話ですが、どんなものか、あなたが何の苦もなく見抜いてくださるものと確信しています。そしてまたこのことをあなたに書く気になりましたのも、学問について、あなたと私との間では語り合わないことが決してあってはならないからです、あなたがそうお求めだからです。ところでもし同じことをあなたに私が要求した場合、あなたの御負担になりませんよう、どうか。

《今日、乗船します。デンマークを訪れるために。何日かコペンハーゲン市にすることになるでしょうから、そこであなたからの御返事を待つことにします。……》(1619・4・29, アムステルダム発, ベークマン宛。文中のドルドレヒトはブレダとアムステルダムの中間にある)³⁰。

てをベークマンによって説明するのは無理がある。この年長の友の「科学」的態度に共感を寄せる素地が、既に用意されていたと考えねばならない。

「科学」的の一つの意味は、「反哲学」的、少なくとも「非哲学」的ということだろう。そうだとすれば、「科学」的態度へのデカルトの共感は容易に説明がつく。学院体験の一つは「哲学」への幻滅であったから。この「哲学」をアリストテレス・トマス主義のそれにのみ限定するのは正しくない。

生徒デカルトが哲学の講義、あるいは討論を通して知ったのは、「哲学」の前提＝公理が「数学」のそれに比すとき、極めて曖昧で、「明証」的ではないという根本的事実である。とりわけ討論は、反正統的「哲学」の可能性を示すと同時に、正統派と同様、反正統派も可能性を現実＝真理性的に変える力を持たぬということを実感させたに違いない。要するに、「哲学」一般に不信の念を抱かせたのである。

この推測はベークマンに対するデカルトの反応によって裏付けられる。デカルトがベークマンに傾斜したのは、この友のデモクリトス主義によってではない。むしろベークマンの奉ずる「哲学」が何であれ、それとは無関係に、あるいはそれを考慮することなく、彼の提出する問題には解を与えることが出来るという事実そのものによってである。すなわちベークマンがデカルトを魅したのは、その「哲学」のゆえにではなく、二人の「哲学」とは独立に決着をつけることの出来る領域の発見においてである。

結局、デカルトのベークマンへの感激は、「哲学」への共感ではなく、「哲学」にもかかわらず、相互に理解し得るものがあることを知ったことにある。このことは逆にデカルトが自分を満足させるものを「哲学」とは別のところに求めていたことを確証する。それゆえ、さしあたってデモクリトス主義にも関心を示さぬデカルトがイタリアの自然哲学にのみ興味を有していた、とするのは不自然である。

以上のことから、少なくとも、デカルトが「哲学」には無関心であったことは確かめられたわけである。

*

*

*

ところでまた、「科学」的ということが「オカルト」的なものへの冷淡さということをも意味するなら、これもまた学院を出る頃に用意されていたと言える。この頃にデカルトは《書齋人の推論》を捨て、《冒険者の推論》を採用したのだが、これは彼を消極・積極両様の意味でオキュルティズムに疎遠にする。

《書物》の放棄は、オキュルティズムについての新しい体系的情報からデカルトを遮断する。言い換えれば、彼の秘学についての認識は、学院時代に得た断片的で批判的な眼鏡で見られたそれにとどまっていたということである。確かに自然魔術は例外的であるにしても、イエズス会がこれを許容したのは、魔術のこの部門は、その名にもかかわらず、反魔術と見なされたからである。デカルトが《書齋》から完全に出てしまったことは、オキュルティズムへの可能な共感の道を自ら塞いでしまったことを意味する。

他方、《冒険者の推論》は一種の体験主義、真理認識の最終的規準を自己の直接的・日常的経験に置くことを意味する。真昼の公共広場は夜の神秘的闇にはなじまない。

デカルトは多くの研究者が指摘してきたように、一時期モンテーニュの後継者だったのである。モンテーニュの反ユナニスム・反書物主義と体験主義を徹底させたという意味で。フランスにおいては、ルネサンスの黄昏はモンテーニュに始まり、モンテーニュ主義は、直接「科学」と結合したわけではないにせよ、「科学」に必要な態度を準備したということが見逃されてはならない。

作品の序、この論文の目的・対象を宣言する部分、である。序は第一に『提要』が音響学、従って自然学の論文ではなく、音楽のそれであることを明示する。音楽は音を通して人間に快をもたらす技術である。それゆえ、それは音＝客体の性質と人間＝主体の本性双方の考察を必要とする。音の性質は音響学＝自然学によって解明され、人間の本性は生理・心理学＝人間学の対象であろう。それゆえ音楽は自然学と人間学の応用によってその目的を達成する技術である。

しかし自然学は音楽において考慮されるべき音の全ての性質を明らかにしたわけではない。音の長短・高低のみであって、音色は今後なお自然学の探究に待たねばならない。他方、人間学の方は、デカルト自身の直接・間接の観察・経験（《世間という大きな書物》）によって構成されているように思われる。実際、『提要』の公理的命題は、(1) 感覚の快はその認識能力の限界内で考察されるべきこと、(2) 全体的に対象の部分間の関係が単純なものに感覚＝精神は快を感じること——算術的比はその典型——という大原則を確立した上で、多分、飽満が快を損なうというもう一つの人間の傾向を考慮して、(3) 相対的複雑さ、多様性の必要を相補的原理として導入している。これら公理群の力点が専ら人間学的事実に置かれていることは明白である。

ところで問題の段落は、本論において考察の対象から外した音色と聴き手の関係を、音色の正体が不明なまま、暫定的に考察しようとしたものである。より一層、主体の側の解明に重点が置かれると予想してよい。

実際、人声の快は対象と精神の適合性によって説明されるとしても、何故、物理的には同一の、友の声と敵のそれは、一方が快を与えるのに、他方が不快をもたらすという差異を生むのか、この問題がこの段落の中心的課題である。そしてそれに対して与えられた説明が《情念の共感・反感》である。これを自然全体を貫く共感—反感の原理の適用と考えるべきだろうか。むしろ対象の側からは説明不能な現象を主体の側から解明しようとした試みと受け取るべきではなかろうか。しかも情念の共感・反感はこの段落における究極の説明原理ではない。それは過去の経験——友の声は彼から与えられた様々な快の経験と結合し、敵のそれはその逆——によって決定されるのである。そのことを明示する比喻として、羊と狼の関係が、恐らく冗談まじりに、選ばれたのである。

『提要』の仮想読者はベークマンであり、彼がポルタの『自然魔術』を読んでいたことは先ず間違いない。この本が当時のベスト・セラーであったからばかりではなく、彼の師、スネリウスが彼のために作ってくれた必読書リストの著者のうちにポルタの名も入っていたからである⁹⁾。デカルトのきわどい比喻、《共感・反感》の用語とポルタの事例に訴えるそれ、は読者がベークマンであったからこそ成立した芸当である。ここには慣例に反するポルタの「異常」な意味論的使用があるのである。このことが明らかになった今、人声一般の快の現象の説明も、それが過去の経験、われわれが最も馴れ親しんでいるという事実、から究極的には説明されていることも疑う余地はないように思われる。時にはテキストは逆向きに読まれねばならないのである。かくして観察可能な経験的事実からの説明という方式は、『提要』において、例外なしに徹底されていることが再認される。

*

*

*

最後にブレダ滞在期において早くもデカルトが、「科学」的——自然魔術に関してはその合理的部分にのみ反応し、その背後にある自然哲学やとりわけ「オカルト」的隠れた性質には関心を示さない——傾向を示し得たのは何故かという問題に一言触れねばならない。

先ず、ベークマンの影響は当然無視できない。しかしこの「科学者」との直接的交流は、どれほど密度の高い、質的に優れたものであったとしても、精々二ヶ月の短期間である。それゆえ全

いもの》だけを食べ続けるならうんざりすること、パンがやはり必要であること、との類比によって。彼は経験的事実にのみその根拠を求めている。

④《それ自体による協和音》、とりわけ《五度と八度》の連続的使用が、作曲において禁じられる理由。ツァルリーノは《偉大な母》＝自然の作品に見られる多様性を模倣する必要・当為に訴えてこれを説明する。すなわちこのイタリア人は大宇宙－小宇宙の図式に従って、コスモスの再現という要請から作曲のこの規則を正当化しようとする。これに対しデカルトは五度・八度によって精神は深い満足を得るがゆえに、曲の最後ならともかく、途中においては注意力を刺激するためにその他の協和音、時には不協和音(むろん許容範囲内にあるとされているものに限るが)の使用が必要だと、専らわれわれの心理的事実にその根拠を求めるのである。

これらの説明様式が首尾一貫していることは明らかである。『提要』においてデカルトはある現象の説明を何らかの体系、「世界観」、「形而上学」に求めることを拒否し——ルネサンス・プラトニズムだけではない。アリストテレス主義も例外ではない。四声と四元を関係づける説明様式も採用しない——、専ら観察可能な日常的・経験的事実にだけ訴えているのである。

ところで自覚的には——客観的にはいざしらず——自己の依って立つ体系をエポケーして、あるいはそれから切断して、ある問題や現象を日常的・経験的事実からのみ解明・説明しようとする姿勢、換言すればどのような哲学的立場に立つ者をも納得させ得る公共的ディスクールを与えようとする志向、こそ近代科学の特色の一つであるとするなら、『提要』のデカルトはかかる傾向を顕著に示している。言うまでもなく、経験的事実の重視は「数学主義」と矛盾しない。事実を語る言語として日常言語よりも数学が選ばれるのは、後者の方が前者より「イデオロギー」の影響を受けず、公共的だからである。

われわれは哲学者デカルトに目を奪われる余り、束の間出現した科学者デカルトを見失う傾向があるのではないか。確かに『提要』から一年もしないうちにデカルトは「形而上学」を有する。しかしこの「形而上学」は自然学を基礎づけるのではなく、逆に自然学に基礎づけられているのであり、自然学は更に幾何学に支えられているのだから、それはむしろ「科学」なのであり、その限りにおいて「反哲学」なのである。そして、ある意味では、カルテジアニズムもこの性格を受け継いでいるとも言える。確かにここでは自然学は形而上学に支えられている。しかしそれはコギト・エルゴ・スムが数学にも勝って明証的すなわち公共的であるとデカルトが考えたからに他ならない。蓋然性の放棄と共に哲学は変質したのであり、「科学」となったのである。それゆえ近代哲学はカルテジアニズム以降ヘーゲル、そしてマルクスに至るまで、自分のものこそ最後の哲学体系であるとする哲学者を数多目撃することになったのである。尤も今はその功罪を論ずる場合ではない。『提要』が「近代的」、「科学的」であることを確認すれば足りる。

いずれにせよ、『提要』全体を一貫している説明様式を破っているかのように見えるのは、太鼓に関するポルタの報告を含む段落だけなのである。このところを再現し、もう一度読み直す必要があろう。

*

*

*

《人間の声をわれわれに最も気に入るものとしているのは、単にそれがあらゆるもののうちでわれわれの精神に最も適合しているがゆえにだと思われる。恐らくそのようにしてまた、情念の共感と反感から最も親しい者の声は敵のそれよりも快いのであろう。太鼓に張られた羊の皮は、別の太鼓で狼の皮が鳴り響いているときは、叩かれても沈黙すると言われるのは同じ理由からである》。

先ず、この段落を『提要』全体の文脈のうちに置き直す必要がある。それが位置するのはこの

承認を得ているわけではないにせよ、コインブラの神学者たちの権威による認知と、デカルトの場合には、フランソワ神父の支持を与えられている。それゆえ学院の教育にボルタに対するデカルトの武装を求めることは出来ない。

更にボルタからの伝聞によるこの事実は、前後の文章に照らして、肯定的に受け止められているように見えることも確かである。

デカルトは《最も親しい者の声が敵のそれよりも快い》事実の説明根拠を《情念の共感と反感》に求められるのではないかとし、その推測を裏付ける事例として太鼓に関する奇妙な現象を引用しているように思える。もしそうだとすれば、デカルトは自分の推測をボルタの権威に訴えて正当化したことになる。実際、沢井繁雄氏によれば、《共感と反感の理論は『自然魔術』全体を貫く基調である》という⁷⁾。そしてボルタの理論はフィチーノにまで遡ることが出来る。

他方で『音楽提要』全体が、ピコによって明らかにされたように、ツァルリーノに負う所極めて多いのだが、このイタリアの音楽理論家もまたフィチーノ的新プラトン主義の世界観を奉じ、これにしばしば究極的説明原理を求めた人物である。

それゆえ『音楽提要』のデカルトがなおルネサンス的世界の住人であったことを認めなければならぬ、すなわち《まさにルネサンス的新プラトン主義の典型》を示す⁸⁾、という田中仁彦氏の判断は、デカルト研究者の主流的見解を要約したものと言えよう。

しかし『音楽提要』にヘルメス主義者デカルトの臭いを嗅ぎつける研究者たちは、この作品を十分にその細部にわたって検討したのだろうか。

*

*

*

先ず、『提要』が何らかの意味で理由づけを与えている箇所を、テキストの順に挙げて行き、そこに共感—反感の原理、一般に小宇宙—大宇宙の照応理論、物活論的世界観が積極的に介入しているかどうかを見てみよう。その後でボルタ的事実に与えられている意味をもう一度問い直すことにしよう。

①『提要』が最も独創性を誇るリズムあるいは拍子と身体の運動との関係についての説明。《音が周囲のあらゆる物体を揺り動かすこと》との類比に求められる。《大きな鐘や雷鳴》などの例を引き合いに。鐘の音が他の物をゆさぶる現象は共感—反感によって説明されるとデカルトは考えたのであろうか。正確なところはわからない。彼はその理由を《自然学者たち》に委ねているから。しかし『提要』全体を通して《自然学者》はこの論文の読者ベークマンに代表される存在を指すと解してよい。そしてベークマンは音が空気の振動であることを明確に認識していた。それゆえ《自然学者たち》が鐘の持つ力を共感—反感によって説明する必要を感じたとは思えない。このような文脈に照合してみると、デカルトがリズム・拍子と身体運動の関係を心理現象あるいは生命現象との類比にではなく、物理現象とのそれによって説明しようとしていることは疑い得ない。

②基本的協和音を導入するための弦の分割を六等分でやめる理由。ルネサンス思想の支配下にある音楽理論家たちは、その理由を六という数の神秘性に求めた。これに対しデカルトは聴覚の識別能力の限界という生理的事実のみに訴えている。数の神秘主義、新ピュタゴラス—プラトン主義、への嗜好は『提要』全体において窺うことは出来ない。加えてデカルトは、算術比がわれわれに与える快感を世界の本性によってではなく、単純比を求めるわれわれの本性のみによって説明する。大宇宙—小宇宙の連続=照応の理論は意識的に拒否されていると解さざるを得ない。

③《それ自体による協和音》が音楽において使用されるべきだ、ということにはならない理由。デカルトはこれを味覚との類比によって説明する。すなわち味覚が《砂糖やこれに劣らず美味し

リウスの『アッチカの夜』に見られるが、典型的なルネサンスの思想家、コルネリウス・アグリッパの『オカルト哲学』でもこの《鳩》は触れられている。それゆえデカルトがアグリッパのこの本を読んだ可能性もないわけではなく、青年士官の秘学への関心が更に広さと奥行を増す方向へ推測する道が開かれそうにも見える。しかしグイエは《鳩》は《よく知られた話》であって、例えばコインブラの神学者たち——彼らは自然魔術を許容した——の『アリストテレス注解』にも言及があると指摘している²⁹。

自然魔術はまた光学的トリックにも強い愛好を有していたことが知られている。これにもデカルトが同調していたことを証する断片がある。《鳩》の記述よりやや時代が遅れて、大体《炉部屋》の頃のものと思われる『エクスペリメンタ』の一節。

《庭園に様々な形、例えば樹木やその他のもの、を表す影を作ることが出来る。

《同じく。ある展望からはある種の形を表すように生け垣を刈り込むことも。

《同じく。室内に、太陽光線が幾つかの穴を通して、様々な数字や図形を表すようにすることも。

《同じく。室内空間に、火の舌、火の戦車、その他の形を出現させることも。これらは全てこれらの形を描く諸点に、光線を集める或る種の鏡によってなされる。

《同じく。太陽が室内で光り輝いて常に同じ側から来るように思わせること、あるいは西から東へ進行するように思わせること、も出来る。こうしたことは放物面鏡によってなされる。そして太陽は屋根の上にある、反射点を或る小さな穴の右側に持つ、凹面鏡において捉えられ、そして同一の反射点をやはりこの小穴の右側に有するもう一つの凹面鏡においても捕まえられ、その光線を平行線となるよう室内に投げ込まねばならない》³⁰。

われわれは『エクスペリメンタ』を人間の自然学—心理学の断片集として読み、この断片をも錯覚の研究という側面から把握した⁴⁾。しかしこの読みは錯覚を積極的に作り出す光学的装置に対するデカルトの関心を排除するものではない。

こうして自然魔術とデカルトとの間には、自動人形や光学的トリックへの強い嗜好という共通点が見られるのである。しかし実を言えば、デカルトがこれらのものに関心を示したから自然魔術に共感していたとするのは速断である。自動人形や光学的仕掛けの記述が自然魔術の書において相当な比重を有していたことを知らない読者なら、上に引用した二つの断片を「近代的」機械学や光学の罪のない遊びへの応用と解したことであろう。

自然魔術が「近代的」一面を有するにもかかわらず、ルネサンス的だとされるのは別の深い理由による。そして自然魔術—ルネサンス思想のデカルトへの影響が問題にされるのもこの別の側面に対するデカルトの姿勢がクローズ・アップされるときである。

『音楽提要』の一節が問題である。《太鼓に張られた羊の皮は、別の太鼓で狼の皮が鳴り響いているときは、叩かれても沈黙する》³¹ という一節である。これを含む『提要』の段落に対するわれわれの解釈は、拙論「デカルトの《音楽提要》」(東海大学文学部紀要 No. 38, 1982)で既に示した。しかし重複を厭わず再論しよう。

*

*

*

先ず、デカルトはこのような「オカルト的」現象を事実だと信じたのだろうか。

確かにこの文は伝聞として提示されている。というのもこれは《……と言われている》と続けられるからである。しかしロディス—レヴィスはほぼ間違いなく、デカルトの情報源がポルタの『自然魔術』であることを突き止めている³²。ところで自然魔術は、イエズス会のオキュルティスム一般に対する警戒体制の中で、例外的に好意を示されている部門である。会の全員一致の

アリストテレス主義は、その日常的知覚・経験の重視のゆえに、プラトン主義が神秘主義に傾く歯止めの役割を演ずるのである。それも不思議ではない。アリストテレス主義は脱神秘化されたプラトン主義の一面を有することを思えば。それゆえ、数学の愛好＝プラトン主義への親近感＝ルネサンス・オキュルティズムへの共感を若きデカルトに推測する田中仁彦氏の解釈¹⁵⁾は、短絡的に過ぎるように思う。

とはいえ、クラヴィウス派はイエズス会の学院において少数派である。加えて少数派にとどまらざるを得なかった理由の一つに、他の会士の目には数学派がうさん臭く映ったことも与っていたと思われる。そのあたりの事情は、1585年1月5日付けのシクストゥス五世の教書からも窺われる¹⁶⁾。これは占星術を非難するものであったが、そこでは《占星術師》は《数学者》とも呼ばれると指摘されているのである。《数学》は、当時、一般にはそういう響きを有していたのである。それゆえクラヴィウスの弟子、フランソワ神父には、《数学》（当然、天文学も含まれる）の正当な地位を擁護するために、《占星術》と一線を画す必要があり、他の会士に勝ってこの秘学を非難すべき動機があったと考えねばならない。

こうしてデカルトがその才能ゆえにフランソワ神父と共に秘学に接したとしても、やはり批判的観点からでしかなかった。それゆえ『序説』が、《錬金術師の約束》や《占星術師の予言》に騙されなくなったことを、この課外読書の成果としているのは、史実を述べたものと解してよい。

しかし《魔術》の場合はやや事情を異にする。フランソワ神父は、《自然的》と呼ばれる《魔術》を、『天体影響論』の中で、肯定的に評価しているからである¹⁷⁾。しかしこれは神父が異端的であったことを意味しない。

イエズス会において権威を有していたコインブラの神学者たちもまた『アリストテレス注解』の中で、自然魔術はデモンの干渉なしに驚くべき業を成就するがゆえに一つの技芸としての地位が与えられる¹⁸⁾、と言っているからである。そして、実際、ロディス・レヴィスが推測しているように、神父と共に、あるいは彼から勧められて、生徒デカルトが当時のベスト・セラー、ジャン・バティスト・デラ・ポルタの『自然魔術』を読んだ可能性は極めて大きい¹⁹⁾。だがポルタのこの書物は、ロンシによれば、様々な《からくり、トリック、魔術》の暴露集という性格を有していたのである²⁰⁾。それゆえ『序説』が、課外読書の結果《魔術師の詐欺》を見抜けるようになったと総括している²¹⁾のも、あながち史実に反することを述べているわけではない。

かくして、生徒デカルトは、魔術を字義通り自然化する《自然魔術》を除いて、あらゆるオキュルティズムへの不信と警戒の念を植え付けられて学院を出たとする、グイエの把握²²⁾を非とする根拠はない。立証責任は、すなわちこの警戒線を突破するだけの魅力は、むしろオキュルティズムの側が備えていなければならないのである。学院の秘学批判は概して宗教的・倫理的立場からのものであって、純理論的立場からのものではない、という性格を有していたにせよ。しかしそれだけにかえて拘束力は強かったとも言えるのである。

§2 自然魔術

デカルトの自然魔術に対する関心は、学校を出た後も持続もしくは復活した形跡がある。

自然魔術は自動人形を好んで論ずるが、『パルナッス』の断片——恐らくその位置から見てブレダ滞在期のものであることは確実である——は青年デカルトもこの趣味を同じくしたことを示している。

《アルキタスの鳩は両翼の間に風車を持つであらう、直線運動をしないように》¹⁾。

タラントのアルキタスの人工鳩への最も古い言及は、2世紀のローマの文法家、アウルス・ゲ

ら与えられているわけではない》と¹⁰⁾。占星術批判に対する現実の需要があるのである。

第二に、神父はカルテジアニズム出現後もプトレマイオスの天文学を支持し、アリストテレスの目的論的自然学を奉じているのである。神父はコペルニクス天文学（その太陽中心説とピュタゴラス―プラトン主義の関連性を指摘する研究者は多い。コペルニクスはその意味でイタリア留学を通し、フィチーノの「弟子」であった可能性は大である）を拒否することにおいて、彼がどれほどルネサンスと無縁なところに位置するかを示し、スコラ自然学から占星術を批判していることにおいて、どれほどイエズス会の「正統派」に忠実であるかを証している。

それゆえ彼の1660年の著書の立場は1610年代のそれと変わらず、授業の思い出が彼のかつての生徒ひとり、多分今はイエズス会の枢要な地位を占めている人物、に老師の再出馬を請わせ、その結果がこの作品の公刊となったと考えてよいのではないか。

しかしフランソワ神父の姿勢を会の一般的傾向より特殊なものにしている事情はある。

神父はクラヴィウスの弟子である。しかも不承々々の弟子ではない。晩年に至るまで数学に関心を抱き続け、1653年以降、『実用算術・幾何』、『水の科学』、『泉の技術』等応用（混合）数学的作品を出す一方、『量論』のような理論数学の書物も著している。この最後のものは数学教育における理論の重要性を強調しつつも、それでも《思弁の学問からの満足を実践の効用と結合》する必要性を説くことを忘れてはいない¹¹⁾。なお数学教授法にも神父は一家言を有していて《舌と手》¹²⁾、すなわち言葉と図解の有機的併用こそ初心者を手を相手にするときには特に効果的であると言っている。

ここでフランソワ神父の師クラヴィウス自身の数学観にも触れておくべきだろう。クラヴィウスは彼の置かれたイタリアのネオ・プラトニズム的風土に敏感に反応しながらも基本的にはアリストテレス主義の立場に立っていた。それゆえ彼は、コイレの言う二つのプラトニズム¹³⁾のうち的一方《神秘数論》には決して傾斜することのなかった人物である。

結局、彼の立場は論理主義であって、数学を最も完全な論理体系と見なすものであった。それは論理の手本、知の規準なのである。デカルトが数学の本質を何よりも明証性に見るのはこの数学観の反映だと考えてよい。この点、数学のむしろ対象の方に目を向け、その完全性を強調する（これの一つの結果が神秘数論である）プラトン主義とは趣を異にする。

数学の論理主義的把握は同時に道具主義にもなる。なぜなら論理は自己充足的でなく、伝達のためであれ、発見のためであれ、何かのために存在するからである。イエズス会の実用主義的教育（フランソワ神父がこの方針にどれほど忠実であるかは今や明らかであろう）はその現れである。それゆえにこそ明敏な生徒に逆にその実用性の狭さを批判されることにもなるのである。

こうしたクラヴィウス＝フランソワ神父のアリストテレス主義的数学観からデカルト自身、生涯、影響され続けたことは、今更言うまでもないであろう。デカルトは確かに数学を愛好し、数学の天分を並外れて有していたにもかかわらず、数学に彼の全関心を占められてしまうほど、この学問に魅せられたことはない。彼がベーコンとの出会いを契機に再び数学に関心を持つとすれば、それはその新しい《用法》を知ったことによる。そして《用法》の見極めがつくと数学への関心を再び失い、他にせがまれてしかこの学問に携わることをしていないのである。

カルテジアニズムにおいて、数学に与えられる地位は、精々、知性の訓練のための予備学に過ぎない。確かに、デカルトは、最終的には、実在を数学的であるとするところまで、プラトン主義に傾斜する。しかしそれを神秘化することはない。この点、彼はケプラーよりガリレイに近いのである。そしてガリレイもまたクラヴィウスの弟子であると考えられること¹⁴⁾は、偶然の一致ではあるまい。

っている書物に全て目を通した》と²⁾。

《奇学 sciences curieuses》とは17世紀末のある辞書 (Furetière, Dictionnaire universel, 1690) によれば《ほんのわずかな人々にしか知られていない学問で、錬金術 Chimie や鏡・眼鏡〔望遠鏡も含む〕を用いて常ならぬものを見せる光学の一部門のように特別な秘訣を有している学問、そして占星術、手相術、地相術のように未来を解すると考えられている学問である。これらにカバラや魔術等も付け加えることも出来る》³⁾。実際、デカルト自身はこの種の学問を《錬金術》、《占星術》、《魔術》と具体化している⁴⁾。

ところで生徒デカルトが手に入れることの出来たこれら秘学を扱う書物はどのような種類のものであったのだろうか。

イエズス会の学院は自発的学習を奨励したとはいえ、生徒に許す読書の範囲は極めて限定されていた。1586年の Ratio studiorum は原則的には学校の教科書や所定の目録に記載されていて、授業で解説される可能性のある、書物のみが生徒に許されるべきである、と明記した上で、特に新しい著者たちによる書物〔ルネサンス人のものは当然これに含まれる〕は数を絞り、しかも厳選するように命じている⁵⁾。加えてダンヴィルによれば、イエズス会は占星術を初めとするオキユルティスムにいわば警戒体制を敷いていたのである⁶⁾。だが、それだけに学院は生徒を、とりわけデカルトのような優秀で好奇心の強い少年を、無菌状態にしておく危険性をも知っていたにちがいない。それゆえイエズス会士デルリオの『諸々の魔術の吟味 Disquisitionum magicarum libri sex』(1608年、リヨン)などの類はむしろ積極的に学院の図書館に置かれたであろうことは推察に難くない。換言すれば、デカルトの読むことの出来た秘学関係の本は原典ではなく、予め批判的色眼鏡付きのものに限られていたのではあるまいか。このように解するとき、秘学はあるいは《極めて迷信的で虚偽に満ちている》⁷⁾、あるいは《悪しき教説》である⁸⁾という『序説』の表現は、正規の学問に関する記述・評価と同様、イエズス会の教師たちあるいは公認の著者たちのエコーであるとしてよいように思える。

いずれにせよ、学院時代におけるデカルトと秘学の交渉を考えると、どの研究者も異口同音に注目する人物、フランソワ神父の存在を無視することは出来ない。神父は1582年に生まれ、1612—16年、ラ・フレシュの神学生兼数学教師であった⁹⁾。それゆえデカルトのラ・フレシュ滞在を1606—14年、あるいは1607—15年とする限り、この神父が1612—13年か1613—14年の学年、デカルトに数学を教えたことは間違いない。なお神父はその後1621年まで他の学院で数学を教えていたこともわかっている。

神父は『天体の影響論。ここでは諸天における神の驚異の御業が詳述され、それらを理解するための天文学者の工夫が説明され、占星術師たちの諸命題があらゆる種類の根拠・権威・経験によって虚偽で有害であることが証明される』という書物を出している。一見しただけで、デルリオのものと同種の本であることは明白である。問題は出版の日付である。この作品は1660年、すなわち彼の教え子デカルトが死んでから10年後、に公刊された。この本は師に対する生徒の逆影響の結果なのではあるまいか。従って師弟時代、師は特別補習の折りなどを利用して、生徒にむしろ積極的に占星術を吹込んだのではあるまいか。もしそうだとすれば、老神父のこの著書は師自身の過失の告白・自己批判が暗に籠められていることになるだろう。

しかし、まず第一に1660年現在、カルジアニスムの出現後も依然、占星術は批判に値するほどの力を保持していたことの方が注目されるべきであろう。事実、秘学は、モリエールの『気前のいい恋人たち』における登場人物の口を通して、1670年に至ってもなお讃えられているのである。《誰もが不可思議 curieuses と呼ばれる、あの美しい諸学問の繊細さに必要な資質を生まれなが

青年デカルトと薔薇十字

石 井 忠 厚

序

われわれが今まで主題的に扱わなかった問題、デカルトと秘学、とりわけ薔薇十字、との関係を明示的に述べる必要が生じた。田中仁彦氏の『デカルトの旅／デカルトの夢』（1989、岩波書店）を偶々読んだところ、この本の第一部はわれわれが検討してきたのとはほぼ同じ問題を扱っていることがわかったからである。

田中氏の労作はデカルトの自伝的精神史—『方法序説』をヨーロッパ全体の精神史と重ねて、ルネサンスの黄昏からバロックの誕生という文脈、とりわけ F. イエーツの明らかにしたそれ、の中で解説しようという雄大な構想の下になされている。その際、氏はカルテジアニズムの生成を中世スコラ学との対立的関係より、ルネサンス思想との、しかもユマニスムよりフィチーノ・ピコのフィレンツェ・プラトニスムに源を発するオキュルティスムとの共感＝反感の弁証法的関係に求めるという斬新な視点を提示されている。この視点の下にあっては、当然、ルネサンス・オキュルティスムの遅咲きながら大規模な開花、単に学問のみならず宗教や政治・社会の改革をも目指す薔薇十字運動との接触は、デカルト精神史の初期におけるピークとして描かれ、その結果、いわゆる《炉部屋の発見＝夢》もこの運動の精神的風土から説明されることになる。

氏の解釈に同意するにせよ、留保あるいは反対の立場を取るにせよ、デカルトとオキュルティスム＝薔薇十字主義との関係をわれわれが主題的に述べる必要が生じた所以である。尤もわれわれの立場は、注意深い読者であれば、われわれが公にした『音楽提要』や『エクスペリメンタ』『オリンピカ』の解釈によって容易に察しがつくはずではあるが。

§1 《珍奇な学》

ドイツにおける遅咲きのルネサンスの花、薔薇十字運動とは一体何だったのだろうか。イエーツの定義によれば、それは《ルネサンスといわゆる科学革命の第一段階の中間に位置》づけられる。そしてその担い手たち、すなわち薔薇十字主義者とは《ルネサンスへのヘルメス＝カバラ的伝統の流れに全身全霊、帰依しているが、その関心のひとつに錬金術〔パラケルスス的な医学と結びついたそれをイエーツは特に念頭に置いているように思う。錬金術への関心はイタリア・ルネサンスにもあったから〕が加わることによって運動の初期段階から区別される人物》である¹⁾。

デカルトがこの薔薇十字運動にいつから関心を持つようになったのかは、とりあえず不問に付し、さしあたり《ヘルメス＝カバラ的伝統》や《錬金術》にいつ接し、どのように反応したのかということのみを問題にしよう。

いつ、という問いに対する答えは容易に得られる。デカルト自身がオキュルティスムに接触したのはラ・フレシュの学院時代に遡ると明言しているからである。

《私は教えられていた学問では満足せず、入手可能であった限り、極めつけの奇学・珍学を扱